

# 1 里山と水田・稲作分科会

## 委員名と役割分担

分科会代表：渡邊英二 実行委員：田崎愛知郎、岡田哲郎、相馬由起子、茂原農業高校農業土木部生徒

## タイムテーブル

- 10:30～10:40 趣旨説明（千葉県立茂原農業高等学校 農業土木部顧問 渡邊英二）  
10:40～11:00 谷津田保全活動・生きもの調査の実践報告（千葉県立茂原農業高等学校 農業土木部）  
11:00～12:00 基調講演「ふゆみずたんぼの生きもの曼荼羅」（宮城県立田尻高等学校教諭 岩淵成紀）  
12:00～13:30 昼食交流会  
13:30～14:30 「ミニコンサート“ 田んぼと自然再生 ”」（トークと歌）  
（むらおこしシンガー 田中卓二）  
14:30～14:40 休憩  
14:40～16:30 パネルディスカッション  
コーディネーター 岩淵成紀  
パネラー 田中卓二 / 新海秀次（ふゆみずたんぼ実践農家） / 岡部弘安（地元有機栽培実践農家）  
佐々木義介（茂原農業 高校 農業土木部）

"

## 出席者数

41名

## 基調講演等の内容

- ・茂原農業高校農業土木部 クラブ活動で実践している一宮町で30年間放棄された谷津田再生の取り組み状況を報告
- ・岩淵成紀さん 「これからの農業は人と自然との共生。人と人の協同。循環型社会の構築を目指すべき。経済の外側にある価値を探ることが大事。『ふゆみずたんぼ』は生物多様性を利用した農業技術で施肥効果や抑草効果が大きい。自然を大切にすることを農業に感じられるようにすることが大切だと思う」などと語った。
- ・田中卓二さん ふゆみずたんぼの歌・棚田にて・からいも畑に陽が落ちてなど全7曲を歌い、自らが取り組んできた自然再生やむらおこしの必要性を訴えた

## 討論会等の内容

追求課題は、「水田農業を環境創造型に導くことができるか」

- ・谷津田の再生について
- ・むらおこしについて
- ・農業と自然環境との繋がりについて
- ・「ふゆみずたんぼ」について
- ・農業の楽しみについて
- ・協働作業の再生について
- ・食育の問題について

分科会の名称

## 分科会の結論

- ・高校生の谷津田再生の取り組みは本来の日本農業への原点回帰（協働作業が楽しい。生き物を見ながら作業するのが楽しい）
- ・田んぼの仕事でも、いま、効率化のために、一人一人が孤立化してしまい人間関係が崩されている
- ・人間関係の再構築が必要だ
- ・農業は重労働のイメージだが、毎日違った自然に出会える楽しみがある
- ・農法に結論はなく、その地域にあったやり方を探せばよい
- ・カロリーを抑えて日本型食育の見直しを進めたい

## 分科会の課題

- ・地域のお祭りごとや話し合いで決まった決まり事が守れなくなってきた
- ・面倒なことや煩わしいことから逃げる人が多くなってきた
- ・地域の実情にあった環境創造型農業の確立

## 分科会の提言

水田稲作分科会では、生きもの視点から田んぼを見直し、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換していくための方向性を、次世代を担う高校生を交えて検討しました。その結果、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換していくためには 高校生のよ  
うな若い力 農村社会の人間関係の再構築 農業をしながら自然を見る精神的なゆとり その地域にあった人と自然が  
共生できる農業の方法や技術の確立 以上4つが必要であると提言いたします。

## その他特筆すべき内容

- ・会場や印刷物の準備、当日の運営等、高校生の頑張りが光った
- ・パネルディスカッションに高校生がパネラーとして参加し、自分の意見を主張することができた

## 反省等

- ・田植え時期と重なり、生産者の参加がほとんどなかったのが残念

## その他

目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

2005/8/18 改訂済み

## 分科会の名称 **2 里山と生物林・ピオトープ分科会**

### 委員名と役割分担

代表：田中正彦 副代表：網代春男 記録係：高山邦明

実行委員：平沼勝男，越川重治，南川忠男，高山翔（中1），高山瑞紀（小4），江澤千春（小4）

当日スタッフ：細川隆，小西由希子，深田友樹英，渡辺英二，田崎愛一郎

### タイムテーブル

9:15 スタッフ集合・打ち合わせ（イベント広場）

9:45～10:00 受付（ラーメンショップ横）～10:15 イベント広場へ移動

10:15～10:25 趣旨説明・資料配付・日程説明・スタッフ紹介（田中），諸注意（高山）

10:25～10:30 下大和田谷津田保全のこれまで（小西）

10:30～10:40 下大和田谷津の生物全般についての解説（網代）

10:40～12:30 グループに分かれて観察会

\*各班の責任者

1班：\*網代，平沼，橋本

2班：\*高山，越川，深田

3班：\*田中，細川，南川

4班（生き物調査班）：\*渡辺，田崎

12:30～14:00 昼食・交流会・自由見学

14:00～15:20 こどもの企画による谷津田・里山遊び（高山翔，高山瑞紀，江澤千春，南川忠男）

15:20～15:30 ふりかえり

### 出席者数

70名（2～75歳）

### 基調講演等の内容

### 討論会等の内容

### 分科会の結論

谷津田・里山は、生きものだけでなく、こどもたちも育んでいた

### 分科会の課題

同様の活動を他地域で実践していくにはどうすればよいか。

### 分科会の提言

谷津田・里山における生物多様性を維持していくためには、人間が適度に管理する田んぼ・雑木林などを維持していくことが重要である。こうしたしくみを広く一般に理解してもらうために、NPO活動や学校教育の現場にも、積極的アピールしていくことが寛容である。そのためには、観察会を実施したり、谷津田・里山に足んでもらう「くみづくり」も必要であろう。

### その他特筆すべき内容

午後のイベントは、中学1年生と小学生4年生の「こども」だけで企画した。普段から谷津田・里山に慣れ親しんでいるこどもは、そこにあるものであそびを考え出すことができた。

### 反省等

観察会では4つの班に参加者を振り分けたが、班員数が10名ほどになり説明などが十分伝わらなかった面があった。もう少し班の数を増やせたらよかったと思う。

その他

目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

## 分科会の名称 3 里山と教育・学習分科会

### 委員名と役割分担

代表・上善峰男

副代表・鈴木敦

記録技術担当・岩橋幹夫

観察指導・亀井尊、小平哲夫、高野史郎、湯上昇、会場設営・中村くに子

### タイムテーブル

1. 自然観察と野草試食会 4月29日、午前9時～午後3時、千葉市立みつわ台北小学校家庭科教室と若葉区原町～東寺山～源町の集落及び谷津田、丘陵を歩き古代から未来へのメッセージ（道祖神や馬頭観音）を検証した。観察終了後は野草調理で舌鼓を打つ。特記気候として地元みつわ台中学校女生徒が参加し野草調理を実習した。食後は講演で千葉県森林研究センター次長の小平哲夫氏から千葉県の森林植生の現状を聞いた。
2. 野外体験 5月7日、午前9時～正午。県立中央博物館生態縁で房総の自然と出でて、中村俊彦副館長が話した後、子ども向け自然観察プログラムの実践をした。
3. シンポジウム 5月7日、午後1時～5時、自然体験はオマケじゃないをテーマ時間いっぱい討議した。この日開会直後に、オカリナとギター合奏で童謡「ふるさと」を演奏した他、途中休憩時間を利用して、たいよう保育園、なぎさ保育園の園児50人が「わらべうた」を披露し喝采を浴びた。

### 出席者数

1. 105名
2. 35名
3. 136名

### 基調講演等の内容

東大名誉教授筒井迪夫氏基調講演要旨「里山とは奥山、深山に対する身近な四壁林の意で、古くから里人によって大切に利用し撫育されてきた。里山が大切にされた理由は大きく分けて二つの理由があった。その一つは、里山が心身に影響する価値を重視した複眼的な里山観。二つ目は里山を木材生産の場と見た単眼的な里山観。前者と後者では里山への対し方が異なるが、緑豊かな里山を願う心は両者とも同じで、前者では「人間の心身と直結した」里山の価値観を重視し、後者では用材を育てる「経済優先」の里山の価値観を重視した。この二つの里山観のうち小中学校での教育は、前者に重点を置くべきだと私は考える。千葉県では、全国に先駆けて一昨年「里山条例」制定されました。これからの里山を、守り育てる人材を創る「森林文化教育」は何を目指すのか、今日はそれらについて考えたい。

(1) 古くからの里山教育（事例）18世紀初頭、秋田藩での里山観の資料として、享保元年（1716年）に林取立役湊五郎兵衛、豊田弥五右衛門提出の上申書には《村々深山・里山ともに先年より郷中に相守立置候は郷山の相定候事。深山、里山古来より村々入会、農林家職候山は郷山に相定候。山林永々候儀は六郡村々御百姓心に御座候》これは秋田藩の二人の山役人（山官）が、深山や里山の育て方について改革意見を述べたもので、趣旨は「未長く山を育てるのは村々の御百姓の心次第で決まるのだから、その人々の毎日の暮らしを思いやることを大事にしなければならない。と、山役人としての心構えを後輩へ説いた教育的意見と判断出来る。この意見書は後刻具体化した。

(2) 18世紀の末、大石敬の描いた里山観《地方凡例録・寛政6年、1791年に示された里山の仕立て方》家の近くにはナラ、クヌギ林など農用に適する樹を植える 平地で地味のよいところにはスギ、ヒノキ、マツ、キリ、カシを上、用材や薪を採る クリ、ビワ、モモなどを植え食料の足しにする チャ、コウゾ、ウルシ、クワを植え収益を計る タケを屋敷の東北の隅に植え、家を温かい陽気で包み、盗賊を防ぎ、火難を除ける 垣根にクコ、ウコギ、カラタチを植え、庭の集約的な土地利用をはかる 空地があれば雑木を植え、用水工事、堤防普請の用材の足しにする。以上に示されたのは、里山が人々の暮らしを第一に考え、その心や知恵を大切にして森林を撫育せよと説いた、当時の里山観。

(3) 森林文化教育研究会の実践「この研究会は、20数年前に首都圏の小中学校に勤務する先生方が自主的に組織し、私が指導を依頼され今日も継続している。現在は夏休みに普及啓発のため、森林文化教育フォーラムで全国を巡回しているが、それまではテーマを決めて毎年夏休みを利用して研修旅行をしていた。その実践事例を紹介したい。奈良朝の都市づくりと自然破壊《8世紀初頭、奈良の都造営のため、滋賀県田上山地方から大量の用材が伐採された。その荒廃地回復の現状を見学。「平安遷都と湖南の荒廃」の授業展開は迫力があり、子ども達に今日的課題として森林利用の原点を考えさせることが出来た》江戸時代、木材大量消費と植林の始まり《第1時限、木場の賑わい。第2時限、木はどこから来た。第3、4時限、山川の掟。ここでは江戸時代に木材が大量に消費されたこと、開発が進み治山、治水が重要視され森林を人工的に育てる必要性が高まったことを授業を通じて、子ども達に捉えさせ、森林と人間の望ましい関係を理解させるきっかけとする。事をねらいとしている。》2002年4月から新学習指導要領による学習がスタートし、子ども達の考える力、生きる力を育てるため「総合的な学習の股間」が設けられた。これは一つの教科でカバー出来ない総合的な学習を年間105～110時間程度行うことが目的です。国際化、情報化と並んで環境教育が重要視されている。環境教育に「森林」を採り入れることでより充実、深化させるこ

とが出来る。森林文化教育を進めるにあたっては、現場の先生方が里山（森林）の持つ偉大さに触れ、感動し、その上で次代を担う子ども達に伝えていくことが大事と考える。

## 討論会等の内容

里山の自然の豊かさが人の大脳を育てる絶妙の装置。だが里山の裏面で経済優先の構図が見え隠れしている。

## 分科会の結論

現状は、物が豊かになった半面、人の心の問題が深刻化。基層文化の根を腐らせてはならない、都市の凋落に繋がる。里山での自然体験が人としての大脳を育てる。自然体験は子ども達の感性を磨く教育の原点でオマケではない。子どもの遊び自然体験「時間、空間、仲間」の三間の確保は大人の責任。

## 分科会の課題

学校教育における「総合学習」の重要性の正しい認識。社会教育が子どもの自然体験を如何に支援するか。社会の有り様を子どもの視点で考える。

## 分科会の提言

## その他特筆すべき内容

1. 自然体験には多くの小学生が参加した。
2. 未来の主婦となる女子中学生が、地域の大人に混じって調理実習に精を出したこと。
3. シンポジウムの会場でオカリナ、ギターの合奏は会場の雰囲気や和らげた。また若葉区みつわ台のたいよう保育園、稲毛区のなぎさ保育園の園児による「わらべうた」は会場の喝采を浴びた。この場合、付き添いの保育士、保護者などが参加者数の増員の役目を果たした。

## 反省等

学校関係者の入場が少なかった。今後はもっと組織的に動員する努力も必要だと思う。  
その他

## 目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

### 委員名と役割分担

代表：稗田 忠弘

副代表：福満 美代子

記録係：小野 鈴子

委員：石田 光男、高宮 文夫、今関 貞夫、日暮 岐夫、戸村 寿彦、鈴木 雅明、鶴岡 義弘、山倉 周幸、桐山 正治、大和田 恭、西塚 健治、鈴木 剛治、野口 英一、本間 一夫、唐笠 敦

### タイムテーブル

9:30～	受付け開始 東金文化会館エントランスホール
10:00～12:00	森林ウォッチング 鴉ヶ嶺の森～あしたの森
12:00～13:00	昼食、交流
13:00～16:00	シンポジウム

### 出席者数

森林ウォッチング 49名 シンポジウム 53名

### 基調講演等の内容

パネラー冒頭発言

<吉岡 實> (山武郡市森林組合)

- ・山武地域には荒れ、且つ病気の森林が多い
- ・60年前の戦争末期に起因。本土決戦を覚悟、敵の九十九里上陸を想定して台地に何kmにも渡る横穴を掘った。粘土質による崩れを土留めする為に徴用で杉、松を切り出す。
- ・戦後、木材用の木が不足、昭和30年代の施策として1反600本を植樹。
- ・実生ではなく差し穂という植樹方法の為、みぞぐされ病などの遺伝形質が現在多くの木に発生している。(クローン杉)
- ・人工林は定期的に手を入れる必要有り。
- ・昔は1年分の燃料確保の為に林業家以外の人々も先を争って山に入り、枝打ちをした。・エネルギーの転換、少子化・高齢化による林業の担い手が不足。

・国からの補助金が直接的に里山、林業に届くしくみができないと林業家の存続はむづかしい。

<鈴木 雅明> (東金市建設部都市整備課)

- ・昭和63年セントラルパーク構想生まれ、何でもできる公園を市民・行政で管理・運営することに
- ・平成11年一般公募により「ときがねの森公園市民の会」を作った。個人に桜の苗木を買ってもらい名前をつけ公園内に植樹。
- ・森のリサイクル活動を多くの市民の手で行えることを目的としている。

<今関 貞夫> (東金市経済環境部農政課)

- ・有休農地は現在7%(於東金市)、丘陵部に多い。
- ・農産品の価格の低迷、労働時間・休日、経済性等による農業ばなれ。
- ・そんな中で「東金・田んぼの学校」がスタート。
- ・有休農地、特に谷津田を有効に活用する。営農の一つの形。
- ・農家を「先生」、参加者を「生徒」と明確に位置づけ。
- ・消費者に安心・安全というニーズがあり有料で農業体験と収益を手にしてもらう。
- ・体験者に真の安心・安全とは何かを知ってもらう場にする。
- ・子どもは泥遊びから周辺の森林等の自然へと行動を広げている。

<鶴岡 義弘> (東金市経済環境部環境保全課)

- ・あしたの森は市民の発案で荒れた土地を整備、行政は支援する立場。
- ・あしたの森づくり応援団が活動。行政機能の活用。
- ・行政の中で環境が仕事になったのは最近。人の暮らしと自然のバランスが崩れている。

<本間 一夫> (さんむフォレスト)

- ・サムフォレストの紹介。地域循環型の住まいづくり。病害を受けた森林の木材で住まいを造る方法の提案。事例紹介。
- ・ペレットストーブ等の紹介。木質バイオマスエネルギーとしての利用。木材を使い切る。エネルギー源としての森林。
- ・自然と経済と環境の循環。
- ・農地の問題と森林の問題は酷似している。

### 分科会の結論

- ・そんな中で「東金・田んぼの学校」がスタート。有休農地、特に谷津田を有効に活用する。営農の一つの形。

- ・ 農家を「先生」、参加者を「生徒」と明確に位置づけ。・ 消費者に安心・安全というニーズがあり有料で農業体験と収益を手にしてもらう。
- ・ 体験者に真の安心・安全とは何かを知ってもらう場にする。
- ・ 子どもは泥遊びから周辺の森林等の自然へと行動を広げている。

### 分科会の課題

- ・ 掛けた手間が農業のようにすぐに収益にならないため、手間をかけずに放っておいた方が楽。
- ・ 子どもを対象としたとき、常に怪我の問題がついてまわる。
- ・ 林業の活性化だけを図っても意味無い。その先の活用するところまでを考える必要がある。
- ・ 林業家の意識改革も必要である。
- ・ 国民の理解を得なければ森林・林業は成り立たない。
- ・ 山は使わないときれいにならない。暮らしと結びつけること。
- ・ 新築家屋の8割をメーカーが作っている。材料の8割は輸入材。メーカー受注の家は地元にも落ちない。足下のもので自分たちの生活を考えないと・・・。
- ・ 地域の特性を活かした家造りは国県単位より市町村レベルのほうが良い。
- ・ 地域循環型の産業や暮らしが、地域の森や自然を活かし、守ることにつながることを再認識する。

### 分科会の提言

- ・ 地域循環型の産業や暮らしが、地域の森や自然を活かし、守ることにつながることを再認識する。

### その他特筆すべき内容

- ・ 木質バイオマスエネルギーの利用など、森林が暮らしと結びつく仕組みづくりが必要である。

### 反省等

・ 林業と暮らしの見事な循環を実現していた過去と、現在の状況にいたる原因を学び、明日の森林をつくる暮らし方を考える機会とする。林業が産業として成立する形での市民参加と行政の協力を考える必要がある。

### その他

行政と分科会を共催し、継続性のある協議の場が出来た。